

● 特 集 ●

第62回大会 シンポジウム

中世の自由学芸 I

——ギリシアから前期スコラの時代へ——

企画趣旨
東京女子大学 水落健治
司会報告
中央大学 土橋茂樹

〈提題〉

古代ギリシア・ローマにおける「自由学芸」の教育
慶應義塾大学 納富信留
カンタベリーのアンセルムスと自由学芸
早稲田大学 矢内義顕
エロイズ書翰に見る中世修辞学としての
書翰作文術
福岡歯科大学 永嶋哲也

〈特別報告〉

初期アウグスティヌスと自由学芸——『書簡26』収録
のリケンティウスの詩を中心に——
水落健治

〈補論〉

東方世界における自由学芸の諸相
土橋茂樹
ポエティウスと自由学芸の伝統
京都大学 周藤多紀
マルティアヌス・カペラ『フィロロギアと
メルクリウスの結婚』
水落健治

〈企画の趣旨〉

1980年代末に始まった文部省（文部科学省）の大学改組をめぐる議論の経緯を改めて述べるまでもなく、昨今の日本では、教育の問題が様々な形で議論されている。そしてその議論の中でひとつの焦点となって来たのが教養教育の問題であったということは異論の余地のないところであろう。

この関連で欧米の大学の教養教育の現状をみると、アメリカにおける「リベラルアーツ・カレッジ」の存在などに象徴されるように、そこでの教養教育は、中世の自由学芸の流れを汲む確固たる伝統に支えられているように思われる。このような問題意識から、2013～14年度のシンポジウムでは、「中世の自由学芸」を取り上げることになった。

これまでの中世哲学会の記録を見ると、「古代末期からカロリング・ルネッサンスへ」（2002年シンポジウム）が自由学芸について取り上げた唯一の企画であり、それ以外に自由学芸についての企画や研究報告はあまりない。また昨今の研究の進展の結果、特に trivium を巡る状況が様々な形で明らかになってきた。

今回のシンポジウムでは、このような状況を踏まえて、中世哲学に固有の主題である「神・超越」の問題をも含む形で自由学芸の問題が論じられ、加えて中世から近世に至る時代変遷の中での「知のあり方の変化」が明らかになることを願いつつ全体の計画を立案した。

まず2013年度には、古代から12世紀に至る時代を扱い、ギリシアの全人教育の理念が中世の時代になってどのように展開して行ったのかを明らかにする。ついで2014年度には、アリストテレスの西欧帰還や大学の成立、ルネッサンスなどによって、自由学芸の理念がさらにどのように展開・変容していったかを17世紀位までを射程に入れて考察する。

この作業によって、現代の教育の諸問題についても考えるきっかけが与えられればと願っている。

（シンポジウム企画チーム：水落健治）
